

1. ノウゴウイチゴ *Fragaria iinumae* Makino

北大植物園には北海道に自生するものを中心に約4,000種類の植物があり、春から秋まで様々な姿を楽しむことができます。植物といえば、「日本の植物学の父」とされる牧野富太郎博士が、この春から放映されているNHK連続テレビ小説「らんまん」のモデルとなっているので、皆さんの関心も高いのではないのでしょうか。そこで植物園だより2023年度のシリーズ②④では、園内で見られる植物のなかでも牧野博士ゆかりの植物について紹介していきます。

シリーズ初回は、春に白い花をつけ花後に赤い実のなるノウゴウイチゴをとりあげます。本種は江戸時代の医者で本草学者の飯沼慾齋ほんぞうにより、自身の著『草木図説』で美濃国の能郷白山（現在の岐阜県本巣市）に産すると紹介され、1907年に牧野博士によって *Botanical Magazine* (Tokyo) 『植物学雑誌』に記載・発表されました。植物の学名は属名、種小名を斜字体で表記し、命名者がその後ろに表記され、本種では種小名に飯沼への献名、命名者に牧野博士の名前があります。北海道・南千島・本州の日本海側にみられ、国外ではサハリンに分布しています。

草丈は10cmほどで、卵形でふちにぎざぎざがある小葉3枚からなる葉がつきます。5月、根元から伸びた花茎の先に2cmほどの白い花が咲きます。イチゴの仲間はふつう5枚の花弁がありますが、本種は花弁が7,8枚あるのが特徴です。花の後には1cmほどの小さな実がなり、赤く熟します。イチゴの仲間の実は、花の下部の花床かしょうと呼ばれる部分が膨らんで、そこに小さな種子が多数ついてできています。

ノウゴウイチゴは、本園では草本分科園で見ることができます。



2. サイハイラン *Cremastra appendiculata* (D. Don) Makino

今シーズンの植物園だよりは、牧野富太郎博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ2回目は、初夏の林床に紅紫色の花をひっそりと咲かせるサイハイランを取り上げます。

本種ははじめスコットランドの植物学者デビッド・ドン (D. Don) によってシュンラン属の新種として記載されましたが、1904年に牧野博士がサイハイラン属に移して *Botanical Magazine* (Tokyo) 『植物学雑誌』に発表しました。植物の学名は属名、種小名を斜字体で表記し、命名者がその後ろに表記されます。表題の学名では、もともなった学名 *Cymbidium appendiculatum* を記載した D. Don が括弧かっこでくくられ、その後ろにその学名をもとにして組み替えを行った牧野博士の名前があります。

サイハイランは、日本では南千島、北海道、本州、四国、九州に見られ、国外ではサハリン、朝鮮南部、中国～ヒマラヤに分布しています。

濃い緑色をした長楕円形の葉が1枚あるいは2枚が根元から広がります。6月、高さ30cmほどの花茎が伸びて、その先に20個ほどの紅紫色の細長い花がややうつむき加減に咲きます。その様子が、戦国時代に武将が兵を指揮するために使った采配さいはいに似ているので、サイハイランの名があります。

よく見ると、1つ1つの花は茶色がかった3枚の細長い萼片がくに囲まれて、上に2枚の側弁そくべん、下に1枚の唇弁しんべんがあり、カトレアや胡蝶蘭こちょうらんなどと同じランの仲間であることがわかります。真ん中にある白く丸い部位に花粉の塊が付きます。

サイハイランは、本園西側にある北方民族植物標本園で見ることができます。



3. オオウバユリ *Cardiocrinum cordatum* (Thunb.) Makino var. *glehnii* (F. Schmidt) H. Hara

今シーズンの植物園だよりは、牧野富太郎博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ3回目は、夏に緑がかった白色の大きな花を咲かせるオオウバユリを取り上げます。

北海道、本州中部以北、南千島、サハリンに分布するオオウバユリは、植物体が大きいので、本州、四国、九州に分布するウバユリの変種とされています。表題の学名では、母種のウバユリの学名の後に、変種を示す *varietas* の省略形 *var.* 以下が続いて、全体としてオオウバユリの学名を表しています。ウバユリははじめ、江戸時代後期に来日したツンベリー (Thunb.) によってワスレグサ属の新種として記載されましたが、1913年に牧野博士がウバユリ属に移して *Botanical Magazine (Tokyo)* 『植物学雑誌』に発表しました。植物の学名は属名、種小名を斜字体で表記し、命名者がその後ろに表記されるので、表題の学名では母種のウバユリの命名者の部分に、もともとなった学名 *Hemerocallis cardata* を記載した Thunb. が括弧かっこでくくられ、その後ろにその学名をもとにして組み替えを行った牧野博士の名前があります。

2m ほどにもなる大きい草で、茎の下の方に長い柄のついた 30cm ほどのハート形の葉が互い違いに着きます。7月、茎の上の方に10個ほどの緑がかった白色の大きな花が横向きに咲き、良いにおいがします。花の咲く頃には下の方の葉が落ちかかるので、その様子を老婆の歯にたとえて、この名があります。

オオウバユリは、本園では北東部分にある灌木園の周りや北ローンの北側の林の中、西側にある樹木園や自然林など、いたるところで見ることができます。



4. ガガイモ *Metaplexis japonica* (Thunb.) Makino

今シーズンの植物園だよりは、牧野富太郎博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ4回目は、晩夏の野山で淡紫色の花を咲かせるガガイモを取り上げます。

本種ははじめ江戸時代後期に来日したツンベリー (Thunb.) によってキョウチクトウ科の *Pergularia* 属の新種として記載されましたが、1903年に牧野がガガイモ属に移して *Botanical Magazine* (Tokyo) 『植物学雑誌』に発表しました。植物の学名は属名、種小名を斜字体で表記し、命名者がその後ろに表記されます。表題の学名では、もともなった学名 *Pergularia japonica* を記載した Thunb. が括弧^{かっこ}でくくられ、その後ろにその学名をもとにして組み替えを行った牧野の名前があります。日本では南千島、北海道～九州に見られ、国外では朝鮮半島、中国に分布しています。

つるになって 2m 以上ものびていき、細長いハート形の葉が向かい合っつきます。茎や葉を切ると、白い乳液が出てきます。8月、葉のつけねから柄がのびて淡紫色の花が固まって咲きます。花の後には長さ 10cm ほどの実がなり、熟すと縦に裂けて中から長い毛の付いた種子が出て、風で飛んでいきます。この毛は綿の代用とされ、針山などに利用されました。また、毒のある植物ですが、中国では薬用とされ、強壯、止血、ヘビ毒などに効果があるとされています。

ガガイモは、本園では西側にある北方民族植物標本園で見ることができます。温室では牧野に関するパネル展示も行っていますので、合わせてご覧下さい。



5. シロヤマブキ *Rhodotypos scandens* (Thunb.) Makino

今シーズンの植物園だよりは、牧野富太郎博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ5回目は、春に白い花を咲かせ、秋には黒い実のなるシロヤマブキを取り上げます。

本種ははじめ、江戸時代後期に来日したツンベリー (Thunb.) によってアオイ科のツナソ属の新種として記載されましたが、1913年に牧野がバラ科のシロヤマブキ属に移して *Botanical Magazine* (Tokyo) 『植物学雑誌』に発表しました。植物の学名は属名、種小名を斜字体で表記し、命名者がその後ろに表記されます。表題の学名では、もとになった学名 *Corchorus scandens* を記載した Thunb. が括弧^{かっこ}でくられ、その後ろにその学名をもとにして発表を行った牧野の名前があります。日本では瀬戸内地域 (大阪、兵庫、岡山、広島、香川) の石灰岩地にまれに見られ、国外では朝鮮半島、中国に分布しています。

しばしば庭園で栽培され、2m ほどの高さになり、縁にギザギザがあって先のとがった卵形の葉が向かい合って枝につきます。5月、枝の先に花びら4枚の白い花が1輪咲きます。花の後、4つに分かれた丸い実がなり、秋には黒く熟します。ヤマブキにもほとんど白色の花をつけるものがありますが、これはシロバナヤマブキとよばれ、花びらは5枚で葉が互い違いにつくので、シロヤマブキとは別の属として扱われています。



シロヤマブキは、本園では北東側にある^{かんぼく}灌木園で見ることができます。また、温室では牧野に関するパネル展示も行っていますので、合わせてご覧下さい。



6. オオタニワタリ *Asplenium antiquum* Makino

今シーズンの植物園だよりは、牧野富太郎博士ゆかりの植物を紹介しています。シリーズ 6 回目は、暖帯の湿った樹林中に生い茂る常緑のシダ、オオタニワタリを取り上げます。

本種は 1929 年にチャセンシダ属の新種として、牧野博士が *Botanical Magazine (Tokyo)* 『植物学雑誌』に発表しました。植物の学名は属名、種小名を斜字体で表記し、命名者がその後ろに表記されるので、表題の学名に牧野の名前があります。日本では本州の紀伊半島及び伊豆諸島、四国の徳島県、九州西南部、琉球に見られ、国外では韓国の済州島、中国の香港、台湾に分布しています。

樹木の幹や岩に着生して、1m ほどの長さの葉が根元から放射状に広がります。葉の裏には胞子の入った茶色の袋が線状に伸びていて、これが葉の縁の近くまで達しているのが本種の特徴となっています。湿った場所で谷を超えるように生えている様子からこの名がついたと言われ、札幌の盤渓や南幌町の防風林内にはこれをずっと小さくしたような形をしたコタニワタリが生えています。



オオタニワタリは、本園の温室にあるシダ室で見ることができます。また、温室では同時に牧野博士に関するパネル展示も行っていますので、合わせてご覧下さい。

